

初等教員養成課程学生の音楽経験が教授行動に及ぼす影響の検討

長谷川 正 規*・飯 村 諭 吉**

(平成28年2月29日受付；平成28年5月20日受理)

要 旨

昨今、高等教育における正課外活動が重視されている。この領域では様々な研究が行われているものの、その活動の多様性を考えるとまだ課題は多く残されている。本研究は初等教員養成課程において、正課外活動での音楽経験が、教授行動にどのような影響を与えているかを検討したものである。

この点について、実際の指導場面の前後に大学生へ質問紙調査を行い、KJ法により問題意識のカテゴリー、サブカテゴリーを抽出し、分析を行った。その結果、大学生の正課外活動における音楽経験は、音楽指導場面への適応に活かされていた。具体的には、音楽に関する専門用語の言い換え、音楽指導上の具体策の立案、実践的指導力の高まりといった点に影響がみられた。このように、初等教員養成課程学生の正課外活動での音楽経験は、音楽指導の技術に変換して活用されていると同時に、音楽指導そのものを省察的に問い直す契機になっていると考えられる。

KEY WORDS

音楽教育 music education, 教員養成課程 teacher training course, 教授行動 instruction behavior, 正課外活動 extracurricular activities

1 はじめに

本研究の目的は、初等教員養成課程学生の教授行動、特に音楽指導の際に音楽経験がどのように作用しているのか考察することである。音楽経験といっても様々な場面におけるものが考えられるが、ここでは大学における正課外活動に着目することとした。正課外活動については文部省高等教育局（2000）の「大学における学生生活の充実方策について（報告）」⁽¹⁾に「正課外教育の積極的な捉え直し」が記載されて以来、様々な角度から検討が行われている。溝上（2009）はクラブやサークル活動のほかに、アルバイトや交友関係なども含んだ大学生活と学生の学びと成長について大規模なデータから検討し、正課・正課外のバランスのとれた活動の重要性に言及している⁽²⁾。清水・三保（2013）は大学での活動と社会人基礎力の関連性について述べるうえで正課外活動も加えて検討し、「クラブ活動やアルバイトが規律性・状況把握力・主体性・柔軟性などに関係している」ことを明らかにしている⁽³⁾。教員養成課程においては横山ら（2014）の大学農園における自主的活動の研究⁽⁴⁾、釜田ら（2004）の子どもたちとのふれ合い活動を扱ったフレンドシップ事業の研究⁽⁵⁾があり、教育的意義を見出す活動のひとつとして位置づけられていた。なお、2012年にベネッセ教育総合研究所が行った調査では、教育系学部の学生は農産系に次いで正課外活動を重視していることが明らかになっている⁽⁶⁾。とはいえ、正課外の活動は授業以上に多様性があり、また目まぐるしい社会変化の影響も受けやすいため、まだまだ研究の必要性がある領域といえる。大局的な見地からの考察からはもちろん、そのための個別の事例研究も増えるべきであろう。

ここで、音楽と正課外活動の関係性について触れておこう。大学に限らず学校の授業以外で音楽に親しむ者は多く、学校での活動なども盛んに行われている。例を挙げれば、ピアノの稽古に通う者、学校の合唱部や吹奏楽部といった団体における活動をする者である。各教科の中でも、音楽は正課外活動との結びつきが非常に強いものに類するといえるだろう。それだけに、大学における教員養成を考えた場合も、大学入学以前・以後に受けた音楽関連の授業と同じくらい、正課外活動で得られた音楽経験が教授行動に及ぼす影響は大きく、無視できないものとなっている。本研究は、この点について検討するものである。

本研究では、上越教育大学において行われている事業「学びのひろば」音楽系クラブでの実践において、参加している大学生に音楽経験と教授行動に関する質問紙調査を実施し、分析を行うことにより進める。

2 「学びのひろば」における音楽系クラブの概要

2. 1 フレンドシップ事業としての「学びのひろば」

上越教育大学における「学びのひろば」は、学生が種々の体験活動を通じて、子ども達とふれあい、子どもの気持ちや行動を理解できる機会を設けることを目的に、大学近隣の小学生を招き、レクリエーションや野外活動、工作、運動などの活動を行うフレンドシップ事業である⁽⁷⁾。なお、フレンドシップ事業とは、平成9年に文部省が発表した「我が国の文教政策」において、「学生が子どもたちと触れ合い、子どもの気持ちや行動を理解し、実践的指導力の基礎を身に付けられる」取り組みとして、国立教員養成系大学・学部へ推奨し、実施されているものである。

その後、平成14年度に刊行された「学校教育総合研究センター年報 第2号（平成14年度版）」⁽⁸⁾によると、それまでの実施の度に児童を集めていたシステムから、登録された子どもと年間を通して関わる体制に転換された経緯が示されている。ここでは、学生事務局の話し合いにおいて、継続的な触れ合いの場を求める声があったものによるものである。

また、「学びのひろば」におけるクラブの活動の種類としては、理科系・体育系といった多数のクラブが運営されており、隔年ごとに新たなクラブを設立もしくは解散することが可能である。本稿で取り上げる音楽系クラブは、平成24年に設立された比較的新しいクラブの一つであり、平成27年度においても設立当初から在籍する学生の意見を取り入れながら活動を展開している。

2. 2 「学びのひろば」における音楽系クラブの活動

音楽系クラブの活動は、表1に示されるように、歌唱や楽器演奏、音楽あそびなど、多岐にわたる内容であり、11月の発表会に向けて年間計画が設定されていた。また、ここで示す“もうじゅう狩り”“ふわふわ バルーンパス”といった音楽以外の活動についても、活動の途中であそび歌を用いることで、音楽活動を積極的に取り込んでいたことが窺える。6月から7月期の活動内容に着目すると、学生は[IB（アイスブレイク）班][歌班][ダンス班]に分かれている。ここでは、ペアグループ活動を取り入れたアイスブレイクから歌やダンスといった集団単位で行う活動に移行しており、子ども同士の人間関係を円滑にすることを狙ったものと思われる。

その後、10月期の活動内容においては、学生は[IB班][楽器制作班][楽器演奏班]に分かれており、手作り楽器の作成やそれを演奏する活動の時間が割り当てられている。また、11月の活動においては、これまでの活動班から[企画班][発表会班][振り返り班]に再編成し、年間の活動を締め括る準備を行っていた。

このように、「学びのひろば」における音楽系クラブの活動は、自由度の高い活動内容を設定することが可能であると同時に、それに伴う指導方法についても学生自身が検討する機会になる。そのため、学生の自主的活動によって自由活発な教授行動ができるという点から、音楽経験が教授行動に及ぼす影響を導くために相応しい団体であると考えられる。

表1 「学びのひろば」における音楽系クラブの活動記録（平成27年）

月	班名	活動名	活動内容
6月	IB班	ペアフル	2人組となり椅子取りゲームの要領で仲間を探す。
		めくぼん	カードを一面に広げ、同じ名前のカードを探す。
		ふってふって～！音さがしゲーム	指示者が振った音と同じ音を探す。（例：ペットボトル）
	歌班	ひだまり列車	じゃんけんをしながら長い列車を作る。
		ころころテンボン	歌のテンポを速く遅くと変えながら歌う。
		ドレミを探せ	ロジャース作曲「ドレミの歌」の替え歌を行う。
	ダンス班	もうじゅう狩り	リーダーが言った名称の文字数分、グループを作って手をつなぐ。
ダンス		シェーマン作曲「小さな世界」にのせて、最後のポーズを考える。	
7月	IB班	まほうのじゅうたん	各班の代表がじゃんけんを行い、その勝敗で絨毯の広さが決定する。
		ひだまりキャッチ	お題とされる言葉の文字をばらばらに話し、その言葉を考える。
		みみをすませば	発言者が発した名前について耳を澄ませて聴き取り、その答えを導き出す。
	うた班	やまびこゲーム	タンバリンのリズムに合わせて、指示者が発した言葉を繰り返す。
		大きなくりの木の下で	作曲者不明「大きなくりの木の下で」を3パートに分かれて輪唱する。
	ダンス班	ダンス	ドイツ民謡「かえるの歌」の替え歌を考え、2パートに分かれて輪唱する。
		ダンス	ネービル作曲「What time is it」、アシュマン作曲「アンダー・ザ・シー」を踊る。

表 1 「学びのひろば」における音楽系クラブの活動記録（平成27年）（続き）

10月	IB班	勝って！つなげてじゃんけん列車	じゃんけんをしながら長い列車を作る。（途中ルールが複数加わる）
		つってつなげて☆パズルンルン	パズルのピースを釣り、パズルを完成させる。
		ふわふわ バルーンパス	風船が落ちないように周りにパスを回す。
	楽器制作班	楽器制作A	ピョピョバック笛：牛乳パックを筒状にし、ストローに息を吹き込む。
		楽器制作B	カップギター：カップラーメンの容器に直線状の風船を貼って鳴らす。
		楽器制作C	レインボトル：ペットボトルの中にビーズを入れて鳴らす。
楽器演奏班	楽器演奏	自作の楽器を指導者がリズムに合わせて演奏する。	
11月	企画班	発表会練習	これまで行った活動 [ダンス] [歌] [楽器演奏] の発表準備を行う。
	発表会班	発表会	これまで行った活動 [ダンス] [歌] [楽器演奏] の発表を行う。
	振り返り班	振り返り	これまで共に活動を行ってきた子ども同士で手紙を書き合う。

3 調査と分析の方法

3. 1 調査対象者の属性

本研究では、前述した「学びのひろば」に設置された音楽系クラブ「ひびけ！ひだまりシンフォニー」に所属する学生31名を分析対象にした。そのうち、調査対象者の学年は1学年が最も多く、性別は男性が35%、女性が65%と女性の割合が多くみられた（表2）。なお、いずれの学生も初等教育教員養成課程に在籍しており、本学が開講する小学校免許が必要のための基礎科目「音楽」を履修中もしくは履修済みである。また、所属コースの内訳としては、所属コースが決まっていない無所属の1年次が4割を占めている他に、芸術系分野以外を専門とする学生が大半を占めていた。その一方、音楽分野を含む芸術系部活動を行う団体に所属する学生が多い傾向にあるため、そこから学生が得る経験的知見を考慮しつつ、本調査を実施した。

表 2 調査対象者の属性

n = 31

		人	%
学年	大学1年生	13	41.9
	大学2年生	10	32.3
	大学3年生	7	22.6
	大学4年生	1	3.2
性別	男	11	35.5
	女	20	64.5
所属コース	学校臨床	2	6.5
	臨床心理学	1	3.2
	幼児教育	1	3.2
	言語系	7	22.6
	社会系	3	9.7
	自然系	2	6.5
	芸術系	2	6.5
	無所属	13	41.9
部活動(サークル活動を含む) ※複数回答可	文化系	3	9.7
	芸術系	25	80.6
	体育系	9	29.0

3. 2 調査方法

2015年11月、上記に示した調査対象者に対して、「学びのひろば」活動実施日の前後に自記式調査票による質問紙調査をそれぞれ実施した。なお、調査票配布時点で研究内容と収集されたデータの取り扱いについて説明し、調査対象者の承諾を得た。その後、調査票の回収については、当該団体の代表者に取りまとめを依頼し、調査員が回収を行った。

3. 3 質問項目の設定

本調査の質問項目は、以下の6つである(表3)。この項目の設定にあたっては、中條ら(2004)⁹⁾を参考に、教授行動に関する質問を適宜に行った。

表 3 質問項目

指導実践前
①「学びのひろば」で音楽指導をする場合において、必要だと思うこと、あるいは考えることは何ですか。
②部活動及びサークル活動の経験を「学びのひろば」の音楽指導にどのように活かしますか。
③小学生を対象に音楽指導する場合において、どのような言葉がけを心掛けていますか。
指導実践後
④「学びのひろば」の指導過程で、部活動及びサークル活動の経験が発揮された場面はありますか。
⑤「学びのひろば」の音楽指導では、どのような言葉がけを指導中に取り入れましたか。
⑥今後、「学びのひろば」の経験をどのように活かしていきますか。

「学びのひろば」実施前に行った事前調査においては、はじめに質問項目①を示し、理想とする音楽指導をどのように捉えているかについて着目した。また、これまで実施してきた音楽指導を踏まえた上で、②対象者が正課外活動で培った経験や③言葉がけに関する教授方法についても検討に加えるとした。

その後、「学びのひろば」実施後に行った事後調査においては、④正課外活動の観点からみた指導実践の省察に加え、⑤教授過程に用いた言葉がけについて抽出した。さらには、⑥「学びのひろば」で得られた経験の活用を窺うことによって、学生の教授行動が教師の力量形成に及ぼす影響について考察できるようにした。

3. 4 データ分析の手順

回収された調査票のうち、記述された言語データを意味のある文脈ごとに切片化し、KJ法¹⁰⁾を用いてカテゴリーを抽出した。その後、各カテゴリーのもつ意味内容の類似性に基づき、サブカテゴリーが抽出された。また、1つの記述内に複数の内容を含む場合については、意味のまとまりごとに分割し、複数のカテゴリーに分類した。なお、本データを分析するにあたって、調査対象者にも協力を依頼し、言語データの分類整理を行った。

4 実施結果と考察

4. 1 抽出された各カテゴリーの検討

本調査では、対象者31名のうち、26名から調査票を回収できた。有効回答率は84.0%である。そこから得られた回答のうち、上記の手順によって抽出されたカテゴリーを表4と表5に示した。その分析の結果、3つのカテゴリーとそれぞれにサブカテゴリーに分類された。

まず、指導実践前の問題意識として、カテゴリーが3つ、サブカテゴリーが10つ抽出された。そのうち、[理想とする教育実践の試み]の回答からは、「学びのひろば」に対する[活動の意義や目的]の方向性を示唆する傾向がみられた。ここでは、従来の小学校音楽科の授業とは趣向を変え、独自性を活かした活動を展開することで、音楽系クラブの目的意識を明確にしていた。それに伴い、[活動の設定]に関する記述にも、これらを基盤とした理想とする活動内容が具体的に示されている。

4. 2 指導実践前における結果と分析

[教育者としての実践的視点]では、関連するサブカテゴリーが多岐に渡っている。特筆すべき点として、[発問や応答の工夫]に関しては、半数近い学生の多くが回答していた。それは、上記の回答の他にも“「どう? 難しいかな?」「簡単だった?」など、その子の表情や言動を見て難易度を調節する”“「～しないでね」というよりも「～しよう」というプラスなニュアンスに変える”といったように、これから培う学校教育に対する専門性を意識しながら、言葉がけによる工夫をしようとしていることが確認された。加えて、[発達段階に応じた支援]においても、教授過程における教師の働きかけについて具体策が講じられていた。

表4 事前調査から抽出されたカテゴリーと記述例

n = 26

カテゴリー	サブカテゴリー	記述例	記述数 (人)	記述率 (%)
理想とする教育実践の試み	活動の意義と目的	音楽を教えるというよりも、活動の中に音楽の要素が入るようにしたい。	12	46.2
	活動内容の設定	学校の授業とは違った魅力的な音楽体験を取り入れたい。	5	19.2
教育者としての実践的視点	発問や応答の工夫	「なぜそう考えたのか」、「なぜそう感じたのか」などの質問を提示し、思考を深めさせていく。	12	46.2
	音楽用語の提示	テンポ、強弱などをわかりやすくするために、イラスト化・言語化した。	9	34.6
	発達段階に応じた支援	全ての子どもが理解できるよう、説明の仕方などを工夫することが必要である。	6	23.1
	音楽表現の向上	どうしたら良い演奏になるか、子どもたちが考えやすいヒントのようなものを言うよう心掛けた。	6	23.1
	教材教具の考案	左右違うボンボンを持たせ、「黄色を上げて!」「赤を前に!」といった言葉がけを取り入れた。	5	19.2
	活動形態の工夫	グループ活動において、仲間と一緒に音楽をつくることの楽しさを感じられるサポートを行う。	2	7.7
教授経験の試行的活用	自己能力の発揮	教える側の視点から、どんな言われ方をするとわかりにくくなるかなど、自分の中の経験を思い出して指導していく。	10	38.5
	指導実践への戸惑い	部活動の指導経験は殆ど生かせず、全体のねらいに沿って指導方法を考えなければならない。	4	15.4

また、音楽指導に関わる〔音楽用語の提示〕においては、小学校音楽科で扱われる専門用語について、3割近い学生が配慮事項を示していた。ここでは上記の回答の他にも、“専門用語を使わず、分かりやすい言葉を使うこと”“～小節目が”や“ここは4分音符だよ”などという言い方はせず、「この長さは『タン』だね」など分かりやすく教える”という記述がみられた。

ここでは、子どもの知識に対応した情報へ置き換える方法として、視覚的な効果を生み出す教材を取り入れながら、より分かりやすい形で説明することを試みていた。それと並びに、〔音楽表現の向上〕においても、回答は少数であるものの、演奏方法の工夫に着目した教授過程が強調されていた。このことから、それまでに培った音楽経験を客観的な視点から捉え直す過程を経て、その後の音楽指導を展開しようとする様子が見られる。

さらに、〔教授経験の試行的活用〕においては、これまで部活動などで得られた経験による〔自己能力の発揮〕が多く回答された反面、部活動での指導経験が豊富であるがゆえに〔指導実践の戸惑い〕が生じる例もみられた。ここでは、大学生を対象にした場合との方法の差異に不安を感じる回答がみられた。この4名は、対象者が培ってきた経験を直接的に反映するのではなく、子どもの音楽経験を加味しながら、指導方法を構築しようとしている。すなわち、指導実践前の状態としては、それまでの「学びのひろば」における実践を繰り返す中で、自らの理想とする指導方法を模索しているようだ。

4. 3 指導実践後における結果と分析

その後、指導実践後の問題意識として、カテゴリーが3つ、サブカテゴリーが8つ抽出された。そこでの、〔新たな教育実践の展望〕においては、約3割の学生から〔指導観の再構築〕に関する回答がみられた。ここでは、今回の指導経験を踏まえた上で、自らの指導観を再構成しようとする様子が見られる。それと同様に、〔学外実習の実践的活用〕においても、今後行われる教育実習やボランティア活動を見据えた指導の方向性が示されていた。

また、〔教育者としての自己省察〕では、教授行動の成果を振り返る〔指導成果の明確化〕に関する回答が多くあったが、その一方で、〔音楽指導上の具体策〕においても、様々な指導方法を取り入れようとする試みがみられた。ここでは、“リズムやテンポを話す時、「歩くぐらいの速さ」「たんとた」などの言葉に変換して話した”“分かりやすいような例えを入れたり、擬音を使ったりした”のように、実践的な場面で子どもの反応を読み取ることによって、その場面に即した指導方法を構築し直していたと考えられる。加えて、〔教授経験の効果的利用〕においては、部活動の練習方法を基にしながら、自らの教育実践に取り入れるといった〔実践的指導力の高まり〕が多く回答

されたものの、音楽分野には直接的な結び付きがみられない〔能力発揮〕に関する課題が顕在化する傾向がみられた。

表 5 事後調査から抽出されたカテゴリーと記述例

n = 26

カテゴリー	サブカテゴリー	記述例	記述数 (人)	記述率 (%)
新たな教育実践の展望	指導観の再構築	音楽が苦手な子どもに対して、どのように工夫して教えるかなど、これからの指導に役立てたい。	8	30.8
	学外実習の実践的活用	子どもとの関わり方を学んだので、教育実習やボランティアなどでも活かしていきたい。	7	26.9
教育者としての自己省察	音楽指導上の具体策	専門用語は使わず、子どもができたかどうかを確かめながら、何度か合わせるような指導方法を取り入れた。	12	46.2
	指導成果の明確化	活動の中には話し合い活動があったため、自由な発想を広げる言葉がけをした。	11	42.3
	自己成長の実感	子どもに対して積極的に関わることによって、活動が円滑かつ内容が濃いものになった。	3	11.5
	自己課題の把握	子どもに何かを説明する時は、何度も繰り返して話す根気が必要であった。	2	7.7
教授経験の効果的利用	実践的指導力の高まり	拍数を言いながら手で違うリズムを打つなど、普段部活で行っている練習方法を取り入れた	11	42.3
	能力発揮の問題	音楽指導に直接的に関連することはなかった。	8	30.8

4. 4 音楽経験が教授行動に及ぼす影響について

これまでの分析からいえることは、実践前後の学生の意識には、学生自身が持つ音楽経験が、少なからず影響を与えていることが窺える。特に、子どもとの応答関係を通して、〔音楽指導上の具体策〕が講じられた背景には、個々の音楽指導の熟達よりも、それぞれの音楽経験が有機的に機能していたと考えられる。例えば、音楽に関する専門用語を噛み砕いて説明するという手法は、これまでの音楽経験を生かしながら、次の手立てや見通しを構築していると捉えられる。すなわち自己の教授行動に音楽経験を作用させ、子どもの実態に即した具体的な指導方法を構築したといえるだろう。さらに、「教える側の視点から、どんな言われ方をするとわかりにくくなるかなど、自分の中の経験を思い出して指導していく」という事前調査の回答のように、実際の指導場面を想定した事前準備の段階から、自らの音楽経験が指導方法を構築する規準になっていると考えられる。それらに加えて、指導前後の調査両方においても、子どもと共に音楽表現を探究する活動を経て、子どもの試行錯誤を支える言葉がけを実践に取り入れる傾向がみられた。また、音楽に関する専門用語の以外の言葉においても、子どもの表現を導き出すために簡易な言葉に置き換える手法が用いられ、子どもとの意思疎通を円滑なものにしていただけと捉えられる。

正課外活動の視点から掘り下げると、〔実践的指導力の高まり〕において、大学での合唱や吹奏楽といった部活動での経験が反映された回答が抽出されたことから、正課外活動で得られた音楽経験は学生の教授行動に及ぼす影響が大きいことが明らかとなった。しかしながら、〔能力発揮〕に関する回答が顕著にみられたように、音楽に関する部活動に所属しない学生からは、「音楽に直接関係することはなかった」という回答が指導後の調査であげられた。一方で、スポーツ等で得られた技術を習得するコツを、音楽分野に当てはめて指導する例もみられた。以上より、正課での音楽知識を土台としながら、正課外活動で得られた音楽経験を融合させることによって、その学生の教授行動が確立されていると考えられる。

5 まとめと今後の展望

初等教員養成課程学生の音楽経験が教授行動に及ぼす影響について、考察を通じて得られた知見を整理すると、以下の点を強調することができる。

まず、正課外活動で得られた音楽経験は学生の教授行動に影響を及ぼすことが判明した。学生の音楽経験は大学内における部活動での経験が多くあげられており、学生自身の指導方法の構築に向けて、密接な関係を持っていること

が確認された。その中でも、サブカテゴリー「実践的指導力の高まり」において、「部活動で音楽の楽しさを感じることができるので、それを伝えるため役に立ったこともある」「吹奏楽や合唱をやっていたので、そこでの経験が生かされたと思う」といった回答が挙げられたように、それぞれの学生が持つ音楽経験を指導場面に適応させることによって、より実践的な指導力が構築されるというプロセスが特徴的である。

また、具体的な教授行動との結び付きは、サブカテゴリー「音楽用語の提示の仕方」「音楽指導上の具体策」からみられるように、音楽に関する用語の取り扱いなどにあらわれることが明らかとなった。例えば「リズムを「タン、タン」というように、手拍子などを合わせて教える」「感情豊かに」といった感覚的な表現ではなく、「言葉をはっきり発音して歌おう」といった指示された側に分かりやすい指導をする」の回答のように、小学校音楽科で扱われる音楽的な専門用語を指導する際に、子どもが知り得る言葉に置き換えることによって、児童と大学生の共感的な理解を進めていた。したがって、これまでに培ってきた音楽経験を振り返ることにより、子どもの視点から指導方法の開発が可能になると考えられる。

こうして、初等教員養成課程の視点から見ると、正課外活動における音楽経験は、学生自身の実践知を強化及び再構築する要因として機能している。それは、指導経験を単に積み重ねているのではなく、学生自身の音楽経験を効果的に組み込むことにより、子どもの状況に応じて柔軟に対応する力量が形成されたと考えられる。また、多様な音楽指導が講じられた背景には、これまでの「学びのひろば」で音楽指導を行った省察、さらには他者の音楽経験から導き出された方策を織り交ぜる過程を経て、より効果的な指導方法を実現していたのである。

今後の展望としては、今回のような個別事例の検討を重ね、学生自身の音楽経験が教授行動に及ぼす影響について、より詳細に究明することが必要となる。さらには、部活動における音楽経験が言語データに示された結果を踏まえ、学生自身の音楽経験を分類化し、運動を主体とした活動を行う学生との比較検討を行うことについても、教授行動の傾向を分析する上で、重要な知見となるだろう。また、本稿では言及していない大学入学以前・入学後に受けた音楽関連の授業との関連性についても、今後さらに検討を加えることとする。

引用及び参考文献

- (1) 文部省高等教育局 (2000) 「大学における学生生活の充実方策について - 学生の立場に立った大学づくりを目指して - (報告)」大学と学生 第427号, pp.19-60
- (2) 溝上慎一 (2009) 「「大学生生活の過ごし方」から見た学生の学びと成長の検討 - 正課・正課外のバランスのとれた活動が高い成長を示す -」京都大学高等教育研究 第15号, pp.107-118
- (3) 清水和秋・三保紀裕 (2013) 「大学での学び・正課外活動と「社会人基礎力」との関連性」関西大学社会学部紀要 第44巻第2号, pp.53-73
- (4) 横山香・増澤康男・渥美茂明・岸田恵津・森山潤・小和田善之・吉國秀人 (2014) 「教員養成大学における農園活動の意義：「兵庫教育大学スチューデントファーム」の実践から」兵庫教育大学研究紀要 第44巻, pp.195-205
- (5) 釜田聡・濁川明男 (2004) 「教師教育の実践報告『学ぶ』ことの意味を問い続けるフレンドシップ事業の意義 - 継続的な子どもたちとのふれ合い活動『学びクラブ』の実践を通して」日本教師教育学会年報 第13巻, pp.122-131
- (6) ベネッセ教育総合研究所 (2012) 「第2回 大学生の学習・生活実態調査報告書」大学生の生活実態 第2章第2節 http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/daigaku_jittai/2012/hon/pdf/data_11.pdf (2016.2.21アクセス)
- (7) 上越教育大学 大学評価委員会 (2015) 「上越教育大学年次報告書 第29集：平成25年度版」第1章第4節 http://www.juen.ac.jp/contents/info/public/data/report/archive/029/1_syou/0_lmokuji.html (2016.2.28アクセス)
- (8) 上越教育大学 学校教育総合研究センター (2003) 「学校教育総合研究センター年報 第2号 (平成14年度版)」上越教育大学 学校教育総合研究センター, pp.54-55
- (9) 川喜田二郎 (1986) 「KJ法—混沌をして語らしめる」中央公論社
- (10) 中條和光・藤木大介・國田祥子・磯崎哲夫 (2007) 「教員志望大学生の教授行動に関するメタ認知的知識の構造：中学校理科の自主学習教材の作成課題を通じた検討」日本教育工学会論文誌 第31巻1号, pp.79-86

Consideration of the effect of music experience of primary education teacher training course students on the instruction behavior

Masanori HASEGAWA* · Yukichi IIMURA**

ABSTRACT

Nowadays extracurricular activities place more emphasis in higher education. Various studies are being in this field, however, there is still more room of research considering variety of the activities. This research was conducted in order to investigate about how music experiences in extracurricular activities influence on the instruction behavior in primary education teacher training course.

On this study, survey by questionnaire for university students was done before and after practical scene of music teaching, then categories/sub categories of problem consciousness were extracted in KJ-Method. As a result, music experiences in extracurricular activities of university students are utilized for adaptation in scene of music teaching. In detail, effects appeared at the following point; rewording musical technical words, planning detail about music teaching, growing skill of practical teaching. In this way, music experiences in extracurricular activities of primary education teacher training course students are utilized converting into technique of music teaching, at the same time, that become an opportunity to rethink reflective about music teaching.